会　報
札響くらぶ
2016年7月 第75号

編集・発行／札響くらぶ　〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札響事務局気付
メール infomation@sakkyoclub.net
ホームページ http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

総会の報告　1
演奏会を楽しく聴くために　2
楽員さんに興味津々！　4
札響くらぶサロン　6
札幌交響楽団に入りたい！　6
第５８９回定期演奏会　7
読んでいますか？　7
札響名曲シリーズ　7
本棚の隅から　8
スタッフの活動報告　8

平成28年度札響くらぶ総会の報告

初夏の兆しを告げるライラックのつぼみも膨らんできた5月14日土曜日、札幌コンサートホール大会議室で開催され、平成28年度札響くらぶ総会時の会員数４００名と報告があり、総会には委任状を含め74名の会員が出席しました。出席できなかった会員の皆さんにも総会の模様を報告します。（副会長　西川吉武）

開会にあたり、札響くらぶ会長上田文雄から挨拶がありました

続いてご来賓として、永井札響専務理事、市川事務局長からご挨拶がありました。総会の進行役として議長に会員から朽木尚明氏を選出して議事を進めました。上田会長からは、「きょうは総会、活発な意見を頂戴しながら、今後１年の活動、皆さんの力でぜひとも多くのファンを獲得し、そして札響の発展のために、北海道の音楽文化の高揚のために、少しでも近づけるような活動になりますことを心から御祈念申し上げます」と挨拶され、永井専務理事からは、「北海道の人口が都道府県では一番減り方が激しくて、実は非常に重大なことで、集客をきちんとしようということで、市川事務局長をキャップにして、集客会議をほぼ１週間ごとに開いております。北海道が世界に誇るオーケストラ、この思いはずっと変わっておりませんし、札響くらぶの方々もそういう思いでいるだろうと思い、これからもお力をお貸しいただければありがたいと思います」市川事務局長から、「いつも楽譜支援とか、中学生招待とか、ご支援いただきありがとうございます。核になる定期演奏会というのは、名曲ばかりではだめなので、かといって知らない曲ばかりでもだめ。新しい曲を御紹介しながら、また名曲に浸ってもらうという、バランスを考えながら進めていきます。」と挨拶されました。

出席された会員から札響に対してこんな質問がありました

最近、札響演奏会もライブ録音で随分ＣＤ化されていますが、世界に冠たる音響のいいＫｉｔａｒａホールの臨場感が感じ取られないのですがという質問に対して、永井専務から札響からも作成するレーベルに対してできる限りＫｉｔａｒａの良さが出るような録音を要望していきます、と答えられました。

平成27年度の活動報告と決算報告そして監査報告をしました。

札響くらぶ会報を年４回各８００部発行し、会員や報道関係や音楽関係に配布しました。札響への楽譜支援を毎年50万円、10年が経過し総額５００万円を寄付することができました。札響くらぶサロンを年間４回開催し毎回40名程度参加されています。

札幌市職員福利厚生会協賛による中学生を定期演奏会に招待する事業も17校５３６名の招待を実現しました。４年間でなんと１８７５名の招待ができました。小学６年生招待のファーストコンサートに続いての吹奏楽部を中心として中学生のセカンドコンサートも順調に進めています。続いて決算報告、監査報告を全会一致で承認しました。

写真右から上田札響くらぶ会長、永井札響専務理事、市川札響事務局長、平成２８年度札響くらぶ総会

平成28年度活動計画と予算案、役員体制についても全会一致で採択しました

平成28年度も札響くらぶ会員拡大と定期会員拡大を一番の課題として引き続き札響くらぶを運営していくこととしました。従来の事業活動に加えて、平成８年札響くらぶ発足から20周年の節目として、①会報についてネット印刷を活用し経費の削減を図ること　②札響くらぶの歴史を連載すること　③外国人留学生の札響演奏会招待事業を検討すること、を提案し承認されました。

予算案採択のあと、役員体制について提案があり、会長上田文雄（再任）副会長鈴木美保（再任）西川吉武（再任）武藤義典（新任）、会計監査井上明子（再任）有田宏（新任）を提案し承認されました。引き続き、札響くらぶ会長から、初代札響くらぶ顧問にさっぽろアートステージ実行委員長の八木幸三氏を指名しました。また、療養のため武藤氏が事務局長を退任し、西川副会長が事務局長兼任することになり、事務局次長５名を全員再任し、新たに武田律子会計担当、中居志津子会報担当に指名し、さらに、運営スタッフ、新規スタッフ含め20名を指名しました。これからも札響くらぶ会員皆さんの一層のご支援ご協力をよろしくお願いします。

8月〜10月の定期・名曲シリーズ演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木幸三（札響くらぶ顧問）

第592回定期演奏会

8月26日(金) 19：00
8月27日(土) 14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／ハンス・グラーフ

ハンス・グラーフ

■デュティーユ／交響曲第２番「ル・ドゥブル」

フランスの現代音楽の中で重要な地位を築いたデュティーユは、今年生誕１００年を迎える。彼は、ドビュッシー以降、「古典的な現代性」あるいは「前衛の古典」と称されてきたように、歴史や伝統の無批判な受け入れや否定ではなく、それらを受け入れつつ、そこにデュティーユならではの個性や独創性をとけ込ませながら、フランスらしい幻想的美しさを内包した作品を作りあげてきた。この曲は、12人の独奏者群とオーケストラが対峙しながら冒頭の単主題的楽章が変奏されていくという手法を取っている。現代音楽は苦手という方も、この独創性溢れる作品に引き込まれていくことだろう。

■ベルリオーズ　幻想交響曲 op.14

失恋のショックからすばらしい作品が生まれるというのは良くある話。作曲は、どちらかというと思考が内向きに進む作業なので、負の精神状態の時は以外と落ち着いて筆が進む。自分の想いがかなわず、薬まで使い幻覚状態で作曲するという、今なら即刻逮捕されそうな危ない状況で生まれたのが「幻想交響曲」だ。ベルリオーズが24歳の頃に出会ったシェイクスピア劇団の女優ハリエット・スミスソンへの想いが通じず、激しい孤独感と彼女への憎しみが原動力となりこの曲ができた。この作品の作曲中、ピアニストのマリー・モークと恋愛関係となった。その頃に「幻想交響曲」が初演され大成功をおさめたのだが、その後モークとの婚約が破棄され、間もなくスミスソンと再会し、めでたく結婚するという結末がある。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

森の響フレンドコンサート

札響名曲シリーズ

「ライプツィヒ：ドイツ・ロマンの故郷」

9月10日(土) 14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／マックス・ポンマー
ピアノ／キム・ソヌク

マックス・ポンマー(C)Y.Fujii

キム・ソヌク

■メンデルスゾーン／「真夏の夜の夢」序曲 op.21

文豪シェイクスピアが書いた全5幕の喜劇「真夏の夜の夢」をドイツ語訳の戯曲にしたものをメンデルスゾーンは読み、大きな興味を抱いた。彼は、その作品にピアノ連弾用の序曲を作曲し後に管弦楽用に編曲した。そして、序曲と劇音楽として「真夏の夜の夢」は、メンデルスゾーンの代表作となる。劇音楽は12曲からなっているが、その中から有名な序曲が演奏される。

■シューマン／ピアノ協奏曲 op.54

やさしく、ロマンチックな第１楽章の第1主題は、まさに愛妻クララへのシューマンの深い思いが込められているかのようだ。冒頭の４つの音Ｃ－Ｈ－Ａ－ＡをＣｌａｒａと読み替えるには無理があるだろうか。シューマンは、早い時期からピアノ協奏曲の作曲に意欲を持っていたが、恩師ヴィークの娘クララとの恋愛が進んでいた頃に、この曲の構想をまとめている。クララとの結婚にこぎつけた彼は、「ピアノと管弦楽のための幻想曲」として、この曲の第1楽章をつくり、その後５年の歳月をかけ２つの楽章を書き上げ、クララのピアノにより初演された。作曲者自身「ヴィルトゥオーゾのための協奏曲は書きたくない」と言ったように外面的な華やかさよりは、幻想味溢れる渋さが魅力だろう。

■ブラームス／ハイドンの主題による変奏曲 op.56

作曲という作業は、思いついた旋律をただ楽譜に留めることではない。その旋律をどのように劇的に展開させ、曲全体をひとつの音楽として構築していくかなのだ。ある旋律をリズムの拡大や縮小、旋律的装飾、和声の変化などで変形させる変奏も作曲技法のひとつ。バロック以前の音楽にも強い関心を持っていたブラームスは、変奏にも優れた技量を発揮し、自分の作品に効果的に取り入れているが、この曲はその代表作と言って良い。作品は主題と８つの変奏と終曲からなるが、各変奏は実に多様で個性的。バロック期の変奏曲の一種であるパッサカリアを使用した終曲も聴き所である。

■R．シュトラウス／交響詩「ドン・ファン」op.20

R．シュトラウスは、前半生で交響詩を7曲集中的に作曲し、後半生はオペラを次々に世に出した。この曲は、交響詩の口火を切った作品で、作曲者の出世作と言っても良い。

「ドン・ファン」は、詩人ニコラウス・レーナウの未完の劇詩。そこから3カ所が自由に選ばれ、スコアの巻頭に標題として書き付けられている。ドン・ファンは、理想の女性を永遠に追い求め、多くの女性を誘惑したが、結局失望で倒れてしまうという情熱的な男。

ドン・ファンのヒロイックな高揚感、甘美な愛の陶酔の後に襲う痛ましいほどの絶望感が、濃密なオーケストレーションで描かれていく。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第593回定期演奏会

9月16日(金) 19：00
9月17日(土) 14：00
札幌コンサートホール大ホール
指揮／マックス・ポンマー
オルガン／室住　素子
ソプラノ／秦　茂子
メゾソプラノ／竹本　節子
テノール／清水徹太郎
バリトン・三原　剛
合唱／札響合唱団
合唱指揮／長内　勲

マックス・ポンマー

■レーガー／モーツァルトの主題による変奏とフーガ op.132

没後１００年となるマックス・レーガーだが、正直筆者はその作品をあまり聴くことがない。レーガーは管弦楽曲や室内楽曲を多数残しているが、今日ほとんど無名なものが多くコンサートで演奏されることも希なので、今回の定期は貴重な経験になるだろう。この作品は、モーツァルトのピアノソナタ第11番「トルコ行進曲付き」第1楽章から主題を取っている。レーガーは主題の様々な要素を抽出して組み立てる性格変奏を行っているため主題

室住 素子

秦 茂子

竹本 節子

清水徹太郎

三原 剛

お聴きいただくのも一興だろう。フーガは多くの声部が複雑で高度な対位法によって絡み合っている。

■レーガー／序奏とパッサカリア二短調（オルガン独奏曲）op. 127

この曲は、オルガンのために書かれレーガーの作品中演奏される回数が比較的多い。重厚な序奏に続き、静かにパッサカリアのバス主題が歌われる。パッサカリアの変奏は、対位法と半音階的な書法が織り交ぜられ自由に飛翔しながら、緊張感を高め重厚壮大なフィナーレに向かっていく。

■モーツァルト／レクイエム　ニ短調（ジュスマイヤー版）K. 626

映画「アマデウス」で、モーツァルトが死に際にレクイエムの旋律を口ずさみながらサリエリに楽譜を速記させるシーンは印象深いが、あんなことが神童モーツァルトでさえ本当にできるのかな～と思ったのも事実。筆者なら絶対に無理だ。この曲は、モーツァルトの死により未完になったいわくつきの作品で、ミステリアスに語られることが多い。モーツァルトの死については、近年になっても病死説の他、毒殺、撲殺など多数の殺害説があり、神秘性は深まるばかりだ。補作は、当初から問題が多いとされてきた弟子ジュスマイヤーの版とオーケストレーションを大幅に改訂したバイヤーやロバート・レヴィンの新版があるが、今回はポンマーが札響合唱団と共にジュスマイヤー版でじっくりと聴かせてくれる。

～～～

♪ 楽員さんに 興味津津！ ⑩ ♪

♫ ヴァイオリン奏者 冨田 麻衣子さんに聞く ♪

会話のように音楽の楽しさを

♪ ヴァイオリンケースはかわいい?!

出身は大阪です。小学校の途中で兵庫県に引っ越しました。札響には関西にゆかりのある方が多いですね。

ヴァイオリンを始めたのは3歳です。父も母も特に音楽が好きというわけではなかったんですが、ちょっと音楽に憧れもあって、みんなで合奏をする音楽教室に私を連れて行ったようです。毎週土曜日にはお姉さんたちと合奏をして、私が楽しそうにしていたので、お友達もできるし教育的にもいいかな、という感じだったみたいです。その頃の両親は、まさか私がプロになるなんてまったく考えていなかったんですね。母は、子供がヴァイオリンのケースを持って歩いているのはかわいいなあと思っていたらしいですよ。

私が最初に使ったヴァイオリンは、一番小さいサイズの32分の1だったと思うんですけど、そこから16分の1、10分の1、8分の1…全部で6台くらい。6年生でフルサイズになったと思います。親はお金がかかるとびっくりしていました。弟がいるんですが、練習が大変そうだから僕はやらないよと言って、やっていません。

ピアノは6歳から始めました。相愛大学の子供のための音楽教室でソルフェージュを習ったり、オーケストラに参加したりもしていました。練習はあまり好きではありませんでしたが、皆で演奏するのはその頃からとても好きでした。

ただ、ヴァイオリンは趣味だったので、音楽専門の学校に行くつもりはあまりなく、師事していた先生がいらっしゃる高校の音楽科も勧められましたが、大学進学のことなども考えて、県立の普通高校に進みました。自由な校風の学校だったので、部活をしたり、興味のある分野の授業を受けたり、9クラスもある学校だったので、色々な友達もできて、とても楽しい高校生活でした。

♪ ゲルギエフの指揮で

出身大学は大阪教育大で教員免許も取ったので、なるとしたら先生かなあと漠然と思っていました。実際、ヴァイオリンが必修になっている高校や盲学校などで非常勤講師として教えたりもしていました。その頃、フリーでも演奏活動をしていたので、どうしようかな、この先どっちにしようかなと…。

ちょうどそのような時に、PMF音楽祭のことを知りました。北海道にただで行けるし、しかもすごくいい指揮者が来ると聞いて、オーディションを受けたんです。その指揮者がゲルギエフでした。さいわい、PMFに受かって（2006年）、首席もつとめました。この音楽祭はとても勉強になりました。ゲルギエフの指揮で演奏できるし、室内楽のレッスンも受けられる。とても良い経験だなあと思いました。次の年は招待制度で参加させてもらいましたが、この年の指揮者はムーティーでした。

そして、なによりもPMF音楽祭はすごく楽しかったんです。オーケストラに入りたいと思っている人たちが各国から来ていて友達もできて、やっぱりああオーケストラはいいなあと思いました。もともと私のヴァイオリンの原点はたくさんの中で弾いていたことだったので、みんなで弾くオケはいいなあ、室内楽で合わせて弾くのが大好きなんだなあと思いました。

オーケストラに就職したい、と思うようになり、次の年の夏に札響のオーディションを受けて、運良く受かりました。札響はPMFのホストオーケストラで、初めて聴いた時に、こんな素敵な音がするオケがあるんだ、上手だなあと感激しました。そのオーケストラの中で演奏できるのが、とても楽しくて幸せです。

5歳のころ発表会で

♪ 古いもの好き！旅好き！

札響では北海道内もそうですけど、文化庁の助成を受けて東北や四国とか色々なところへ演奏旅行に行きました。旅行が好きなので、様々な土地で観光し

プロフィール

大阪府出身。大阪教育大学教養学科芸術専攻音楽コース卒業、同大学大学院芸術文化専攻修了。第８回クラシックコンクール全国大会入選、２００６、２００７年国際音楽教育祭ＰＭＦに招待生として参加。レオン・シュピーラー、レジス・パスキエ、ステファン・ピカールの各氏のレッスンを受講。これまでに曽我部千恵子、小谷公子、稲垣美奈子、稲垣琢磨の各氏に師事。２００８年１２月札幌交響楽団に入団。

たり、その土地の美味しいものを食べたりすることができて、とても楽しいです。

札響50周年のヨーロッパツアーでは、様々な国で、色々な景色や建物をあちこち見て回りました。特に、ケルンの大聖堂やローマの遺跡などでは、あまりの迫力に圧倒され、感動しました。学生時代から、色々な場所を旅行していて、国内ですと京都や金沢などの古都も大好きです。私たちは、楽器も音楽作品も、100年以上も前の古い時代のものに接していることもあり、古い建造物や歴史的な遺産などには、それらに通ずる何かがあるような気がしています。海外で、もう一度行ってみたいのは、南フランスとモナコですね。暖かく、とにかく景色が美しかったです。

初北海道は実は札幌ではなくて、知床でした。あまりに雄大な景色に驚いて、外国に来たような気分になったのをよく覚えています。

北海道に来てからは車を運転しています。芸森に行くためなんですが、冬はあんまり運転したくないですね。夏にはお休みになると、本州から知り合いがよく来るので、遠くまでドライブをしたりします。北海道は、食べる物も景色もたくさん魅力があるのですが、まず中島公園とキタラホールだけでも、皆さん喜んでくれるので、嬉しいですね。藻岩山に行くと夜景がきれいだし、あとは定山渓温泉や豊平峡温泉、支笏湖、時間がたくさんある時は帯広の方に遠出して、アウトドアをして遊んだりもします。普段、お仕事で行く時はなかなか遊ぶ時間がないので…。

北海道は最高です。ずっと広がる景色は本州ではありえないし、お料理もおいしい、人も優しい…。北海道は街も人も静かなので、最初はちょっとびっくりしましたが、慣れると快適で本当に過ごしやすいです。

PMFでゲルギエフ氏と

♪ 体を鍛えて

演奏している時はずっと同じ姿勢なので、身体を動かすことも大事だと思い、最近は、ヨガをしたり泳いだりしています。ヨガは体幹を鍛えるので、呼吸が深くなって楽に弾けるようになります。本番では座って弾いているので、重心を整えて座るためにも大事かなと思っています。

最初の頃は2時間演奏したら、ばててしまったり、よく体調を崩したりしていたので、これでは良くないなと水泳で体力をつけようと思いました。気分が乗っているときには、いっぱい泳ぎます。水に入ると気分転換にもなりますし、とても楽しいです。

♪ セカンドは奥が深い

私は、入団してからずっとセカンドヴァイオリンを弾いていますが、内声を受け持つのはすごく楽しいです。ファーストヴァイオリンはメロディライン、チェロは支えのラインで、その中間を彩るのがセカンドとヴィオラだと思います。音楽を作り上げていく上で、とても重要な役割を担っていて、メロディを弾くこともちろん楽しいことですが、セカンドを演奏していることには何か奥が深いものを感じています。弾き方をあれこれ工夫したり、今度はこうやってみようとか、尽きない色々なことがでてきて、それ次第で全体の音楽が変わってきたりするんです。

たとえば会話の時に、聞き手の相槌によって話し手の話しやすさが変わるように、セカンドヴァイオリンでも合の手ではありませんが、アンテナを立てて、周りがどう演奏したいのかをキャッチしながら、それに応えられるような演奏ができるように心がけています。まだまだうまくできないこともたくさんありますが、試行錯誤しながら、いつも演奏しています。

カルテットなど、少人数のアンサンブルでも、セカンドヴァイオリンはたぶん一緒に演奏する人によって、いろいろと弾き方が変わっていくんだと思います。どう弾いたら合わせやすいのか、どうやったら4人の音楽がもっと変わっていくのか、常に色々と調整しながら弾くようにしています。同じ曲を色々な人と演奏することも多いのですが、その時々、その場所、演奏しているメンバーによっても弾き方が変わりますし、同じ曲でも1回1回、演奏が変わっていくのが面白いですね。

札響には「札響サウンド」というものがすでにでき上がっています。新しい人が入ってくると、その新しい音がみんなの音になじみつつ、だんだん時間をかけて、少しずつ札響の音も変わっていく感じなのではないでしょうか。

札響の音って、最初に聞いた時にすごくきれいな透明感のある音だと思いました。それは今でもずっと思っています。そこに情熱的で、冷めた感じではない熱いものがずっとある。その札響の中にいられるということ、このいい演奏を作っている中に私もいるんだということがすごく幸せです。

♪ アンサンブルの楽しさを

今は演奏をメインにしていますが、将来的にはオーケストラや室内楽をやっている学生に何か教えてあげられる機会があればいいなあと思っています。私はアンサンブルで演奏するのが好きなので、ソロ以外にも一緒に演奏する楽しさがあるんだよ、ということを伝えられたらなあ、と思います。

例えば二重奏の時に、上のメロディを生徒が弾いて、そこに伴奏を付けると、急に演奏が変わって、気分良く上手に弾き出すんですよね。一緒に演奏していると、どんどん楽しそうにノリノリになって弾いてくるので、そういう楽しさを一緒に弾いて共有できればいいなあ、と思います。

せっかく楽器を演奏しているのだから、そういう合奏の楽しさが伝われば、いいですよね。アンサンブルって楽しいんだよと。会話をするように、相手の音を聴き、音楽って楽しい！と感じてもらえればとても嬉しいです。

大学院時代に憧れのモナコ旅行へ

2016年4月9日
テラスレストランキタラ
担当　井上・村山・中居

第14回札響くらぶサロン開催

札響の過去と現在のヴァイオリニストが登場！

第14回札響くらぶサロンが6月4日（土）教育文化会館401号室で開催。過去最多51名そして札響専務理事の永井さんにもご参加いただきました。

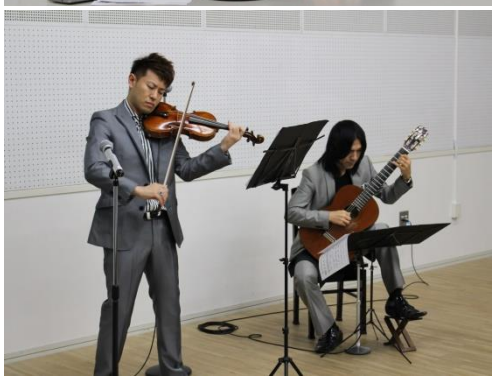
第1部は札響定期名演奏の想い出。札響発足のころの第1ヴァイオリン奏者小林英三郎さんのお話を会員の川端さんにまとめていただきました。『小林英三郎さんは1932年、秋田県能代市でお生まれになり、中学校1年生のときからヴァイオリンを始められた。昭和36年（1961年）7月1日、札幌市民交響楽団（札幌交響楽団の前身）の発足から5年間、第1ヴァイオリンの準団員（アマチュア）として活躍されたが、発足当時、小林さんは札幌医科大学大学院の1年生だったので、その学業の合間を縫っての練習は、正に時間との勝負であった。常任指揮者・荒谷正雄さんの指導は厳しく、睨まれたら震え上がったとのこと、特に第1回定期演奏会（9月6日、於札幌市民会館）のフィガロの結婚序曲とベートーヴェンの交響曲第1番、第2回定期のストラディバリウスを抱えた諏訪根自子とのメンデルスゾーンの協奏曲については、記憶に残る猛練習続きだったようである。さらにホルンの竹津宜男さんとのモーツァルトのディヴェルティメント K.287の演奏の想い出など当時を彷彿とさせるお話が続いた。』

第2部はミニコンサート。札響ヴァイオリニスト熊谷勇大さんとギタリスト薮田建吾さんの「デュオ・エスペランサ」として登場いただきました。演奏曲目はこちらの5曲。パガニーニから「カンタービレ」「ヴァイオリンとギターの為のソナタ第6番」「チェントーネ・ディ・ソナタ」、ピアソラから「タンゴエチュード第3番」「タンゴの歴史」、そしてアンコールはジャンゴ・ラインハルトの名曲でした。熊谷さんからのパガニーニとピアソラのお話がとても興味深かったです。今回は若い女性の姿も見え演奏も会場も華やいだとっても素敵なコンサートでした。

第3部は交流パーティー。熊谷さんには各テーブルを回っていただき感動のあまり失神しそうなファンもいたような。二次会会場でもさらに演奏が続き盛り沢山のサロンとなりました。

次回、第15回のサロンは9月11日の豊平館です。またみんなで感動を分かち合いましょう!!

（サロン担当　上野文博　記）



写真上：小林英三郎さん、下：第2部のミニコンサートで演奏する熊谷勇大さん（左）と薮田建吾さん（右）

札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業

札幌交響楽団に入りたい！

一般財団法人札幌市職員福利厚生会協賛

定期演奏会に招待した中学生からのお礼の手紙をご紹介します。全員載せたいのですが紙面に限りがありますので今回は各校2人となっています。ご了承ください。

沢山の中から選ぶのは大変ですが、中学生がどんな観点で演奏会を聴いているかいつも楽しみに読んでいます。（佐藤・定政）

《第585回定期演奏会》

1月23日　平岡緑中学校吹奏楽部

▼私はまだ1年生で、小学生のころなどはピアノをやっていましたが、全くと言っていいほど楽器や音楽とは無縁でした。中学生になり吹奏楽部に入部すると、自然に音楽や自分の楽器に興味を持ち、今まで歌手の曲などばかり聞いていた私が今まで興味のなかったクラシックも聴いたりもしました。音楽のことに少し詳しくなると曲の聴き方も変わってきました。パートの先輩たちと高校の定演を聴きに行ったりもしました。色々な人の演奏を聴いてたくさん勉強になることがありました。しかし、私は高校や中学生の演奏会を聴きに行くことがあっても、大人のプロの人の演奏は生では一度も聴いたことがありませんでした。なので、今回はそれも札幌交響楽団の定期演奏会にご招待していただきとても素直に嬉しかったです。特に印象に残ったのは「ヴァイオリン協奏曲」です。ずしっと重く心地好い音でプロのすごさを改めて感じました。その後の客席からの感動の拍手が鳴りやまなかったことも印象に残っています。

▼私は札幌交響楽団に入りたいと強く思っており、日々努力しております。ものすごく勉強になるので、また来年も招待していただければと、心から思っております。

《第586回定期演奏会》

2月20日　八条中学校吹奏楽部

▼チェロの音に耳をすませてよく聴いていたのですが、こんなに厚みのある音なんだとか、他の楽器でも歌うってこういうことなんだ、と勉強になったことがたくさんありました。素晴らしい演奏をありがとうございました。

▼私はホルンを吹いていて今回の演奏を聴いた時、「あれっ、ホルンってこんなにキレイな音！?」と思いました。この演奏会のおかげで私の目標が出来ました。

《第587回定期演奏会》

3月5日　宮の森中学校吹奏楽部

▼前にトロンボーンフェスティバルに参加させていただきましたが、その時に札幌交響楽団のトロンボーン奏者の方々の演奏を聴き、とても感動しました。4本のトロンボーンが奏でる音色は一つにまとまっていてホール全体に響いていました。高音でも表情豊かに吹いていて驚きました。今回の演奏会でも低い音が響いていました。アンサンブルの時とは音色が異なっていてその曲に合わせて音色が変わっているのは、さすがだなと思いました。私も少しでも聴いている人に感動してもらえるように努力していきたいです。

▼今回のプログラムはクラリネットの目立つ曲が多く嬉しかったです。また、チャイコフスキーの「交響曲第4番ヘ短調」の3楽章でピッチカートだけで演奏する場面では可愛らしい音色と「これ、どこまで続くんだ！?」という気持ちと「どう締めくくるのか」という気持ちが混ざり合いドキドキしながら聴いておりました。私も聴いている人を「次はどうなるの？」とワクワクさせられるような演奏をしたいです。

第589回定期演奏会を聴いて

ソリストはいつ？　どこから？

5月の定演のメインは、誰が見ても「マーラーの4番」なのですが、私にとっては「牧神の午後」も大きな魅力でした。

当日（5月13日）、「牧神の午後」はポンマーさんが振り下ろす前に、フルートから自然に始まりました。そのあとフルートからホルン、クラリネット、オーボエなどへ旋律が受け継がれたり、またフルートに返されたりして、幻想的な風景が作り出されていました。水の流れのように常に奏されていたハープと曲の終わりに数回鳴らされたアンティークシンバルが透明感を一層際立たせているように感じました。短い時間でしたが、現実を超えた世界に浸ることができました。

二曲目の「夜想曲」もすばらしい演奏でした。私には馴染みの薄い曲だったのですが、イングリッシュホルンの旋律と迫力ある三連符のリズムが強く印象に残っています。そして何よりも終曲の「シレーヌ」では、歌詞のない女声合唱によって神秘的な音の世界が現れました。この日、札響合唱団の前には背の高い二本のマイクが伸びていました。天上に消えて行くようなこの歌声を記録にとどめるためのものなのでしょうか。

「マーラーの4番」は第4楽章にソプラノの独唱が入ることになっています。ところが団員が全員席に着き、チューニングが終わっても、ソリストは一向に現れません。そのうちに第1楽章が鈴とフルートとともに始まってしまいました。曲が始まったからには、ソリストはベートーベンの「第九」と同じように、楽章の合間にでも出てくるのだろうと思っていました。

第1楽章は聴いたことのある旋律が次から次へと出てきて、息つくひまもありません。第2楽章ではコンマスのソロ・ヴァイオリンに魅了されました。そして第3楽章。あまり聞き覚えのない長い静かな楽章でしたが、終わりに近づいた頃、突然ティンパニとトランペットが鳴り響きました。それが合図であったかのように、ソリストが静かに現れたのです。この登場の仕方は切れ目なく第4楽章に入るための仕掛けであったのだ、とひとり納得しました。この後、ソプラノの歌声が「天上の喜び」にふさわしい美しいものであったことは言うまでもありません。

この日もまた聴きどころ、見どころの多い、すばらしい演奏会でした。

（会員　村山英朗）

読んでいますか？

「楽員さんに興味津津」を・！

毎号「楽員さんに興味津津！」をご愛読下さいましてありがとうございます。

まだ読んだことが無い！なんておっしゃらないで是非ご一読ください。

この記事は、「札響くらぶ」が発足して会報を作る際に楽員への好奇心が沸いたことからはじまりました。「プレイヤーズ・トーク」として10年間に亘って連載をしておりました。

50号（2010年3月）までに在籍されていた楽員約80名が登場しております。（過去の記事は札響くらぶのホームページで読むことが出来ます。）

札響くらぶのスタッフが入れ替わり、暫しの空白がありましたが、近年入団された若い楽員の人柄を詳しく知りたいのと、新しい楽員に「札響くらぶ」の活動を知ってもらいたいとの思いから六六号（2014年4月）よりインタビューを再開しました。

新たに担当を任され、協力してくれるスタッフに恵まれて10回まで漕ぎつけました。現在この記事は3名が担当しています。

主に新しい副首席の方を優先しておりましたので、責任者の私が若い男性ばかりを追いかけて居るのじゃないんですよ。もっとも楽屋の出口で待伏せはしましたが…。

楽員にお会いしてみると、皆さん幅広い能力をお持ちで、他の職業に進んでも、活躍なさったと思います。

どの職業につくか、悩み迷ったことも有るでしょうが、やはり音楽への情熱が已み難く、この道で生きていくと決心し、ひたむきに努力している姿が眩しいです。

その上、札響に入団出来たことをとても喜んでいるのが素直に伝わってきます。いつも楽しくインタビューをしますが、その後の構成と編集に中居と村山が苦戦しております。

また、楽員さんには、細部のチェックに何度も時間を割いていただき感謝しております。

校正の上、本人に内容を検討して頂き、承諾を得てから会報に掲載します。

是非お読みになって、感想を寄せて下さると嬉しゅうございます。

（インタビュー担当　井上明子）

名曲シリーズを聴いて

弦こそオーケストラのいのち

対角線上の三階席に典雅な香りをのせた、ヴァイオリンによるト長調の和音が飛び込んできた。6月18日の「森の響フレンドコンサート」では、ウィーン・フィルのコンサートマスターが、という先入観にもよるのだろうか、僕が少年期からこよなく愛してきた懐かしいウィーンの響きに背中が震えた。そう、弦こそオーケストラのいのちなのだ。

そして第1ヴァイオリン10からコントラバス2という比較的小さな編成も、モーツアルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」とヴァイオリン協奏曲第3番にはふさわしかったのであろう。羽毛の肌触りのピアニッシモが恍惚感に彩りをそえた。

記憶をたどってみたら、シュトイデのヴァイオリンに接するのはこれが3度目である。トヨタ・マスター・プレイヤーズ＝ウィーンとのベートーヴェンのロマンス第1番（2013年4月9日）、さらにシュトイデ弦楽四重奏団のリーダーとしてのモーツアルトの弦楽四重奏曲第14番（2014年11月12日）では「これぞウィーンの弦」を堪能した。そして今回は協奏曲のソリスト、コンサートマスターとしての登場である。コンチェルトにおけるソロ・ヴァイオリンのエレガントさは言うまでもなく、彼は札響からまぶしいばかりの響きを引き出した。

ベートーヴェンの第5交響曲では、いわゆる12型の編成に拡大されたが、きびきびとしたリズムの推進力のもと、弦楽器の弾むような振動が心地よかった。指揮者なしで61人が整然と音楽をはこぶ、札響の合奏力にも脱帽である。ウィーンからやってきたシュトイデの求心力であろうか。

かなり昔、カラヤンのリハーサル風景の映像に魅せられたことがあった。そこでは、管・打楽器そっちのけで弦楽器ばかりが繰り返し指示を受けていた。素人ながら、オーケストラにとって弦楽器がいかに核となるのかということをその時認識させられたのだ。

それがオーケストラ作品を鑑賞するうえでの原点となっているのであろうか、当日の演奏会終了後僕の胸に真っ先に去来したのは、「素晴らしい瞬間に立ち会えたなあ」という幸福感であった。

瞬間に鳴り響き、瞬時に消え去ってしまう音の芸術、はかなさゆえの美しさ。ウィーン・フィルのもう一人のコンサートマスター、ホーネックが札響を牽引した2015年1月10日に加えて貴重な想い出が刻まれた。

（村岡範男）

随想　本棚の隅から　16

昨年の秋、ピアニスト石橋克史さんのリサイタルがあった。

知人の甥御さんなのでどんな方なのかな？と興味があって行ってみたら、自分のピアノを持ち込んでプログラムに「使用ピアノ：ブリュートナーＭｏｄｅｌ２１０」、調律「蛯名勝洋」と入っていた。

ただ一言「すごい！」

後日、彼が曰く、「他の楽器は演奏会に自分の楽器を持って行くのでピアノも自分のを持ち込んでみたかった」とおっしゃっていたので、なるほど、相当な凝り性の人なのだなと感心した。

ふと、アルド・チッコリーニが80歳のリサイタルの時、自分の楽器を持って来たのを思い出した。

石橋さんの叔父さんに当たる方は我が家の忘年会の常連で「今年の忘年会に甥も行ってみたいと言っている」、と言うので札響の河邊さんに話すと「石橋さん？　僕知っていますよ」と言うので昨年の我が家の忘年会にお二人に演奏していただいた。

その為に私は、まず、ピアノを手に入れた。義理の姪に「あのねえ、キタラでリサイタルをしたピアニストが札響のヴァイオリニストとコンサートをするので、ピアノにとってはとても名誉なことだから私に貸して頂戴！」と我が家に引き取った。

例年の如く物置化していたアトリエと仏間を片づけ家中の椅子をかき集め何とか会場は出来た。

調律は恐れ多くも石橋さんの調律師にお願いした。

例年なら河邊さんの独奏で彼はいろいろ工夫をして面白いことをしてくれていたのが、ピアノの伴奏が付いたら全く違って本物のとてもとても素敵な演奏会になった。

二人の豊麗な演奏に、もう有ることさえ忘れかけていた私の琴線が大風の電線のごとく唸りを上げた。

ヴァイオリンもピアノも独奏があり、特に私の大好きなショパンのノクターンは感動的で心に残る一夜だった。

それにしても、我が家は札幌でも一・二を争うほどの殺風景な共同住宅街の中で（昔は閑静な住宅街だったのに）、住宅メーカーの「マンション（縦型棟割長屋じゃないか）をお建てになりませんか」と言うしつこい勧誘にも抵抗を続けている頑固な古屋なので、こんな所で、まさかこれほどの演奏が行われているとは、外を通った人には想像出来ないだろうと思うと愉快でたまらない。

話は変わって、年が明けたある日、書店で何気なく手に取った小説で最初の一行が「森の匂いがした、秋の夕暮れの…」この本は私が読まなくてはならないのだと直感した。

何故かと言うと、私がピアニストの大平由美子さんのリサイタルでいつも感じるのは「森の薫りがする、春の若葉が萌えだすときの…」著者と感性が似ている。

予備知識無しで読んだら調律師をテーマにした内容だったのに驚いた。なかでも調律師がピアニストを育てると言う言葉に「なるほどそういうものか」と感心した。

調律師の役割の大きさを教えられた『羊と鋼の森』面白かった。

直木賞の候補などと騒がれていたが本屋大賞の一位になった。

この賞が一番相応しいと私なりに思っていたので他人事なのに嬉しかった。

さて、今年も半分過ぎた、光陰矢の如し。近年老人たちの間で流布されている「きょういく」と「きょうよう」を積む為には、光陰はロケット弾の如し。「（註）・今日行く所がある・今日用事がある」

遅まきながら教養と教育を身に付けるために、私の「きょうよう」は芸術の森美術館の「有元利夫展」へ長年の夢を叶えに…。

（井上明子）

スタッフの活動報告（平成28年4月～6月）

●札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業実施

4月9日（土）、第588回札響定期演奏会において、藻岩中学校33名を招待しました。

●会報「札響くらぶ」第74号発行

会報「札響くらぶ」第74号700部を発行し、4月25日（月）午後3時00分から札幌コンサートホール2階大会議室において発送作業を実施、約600部を会員、楽員、報道関係に発送しました。

●第1回札響くらぶ運営会議開催

4月25日（月）午後6時00分から札幌コンサートホール2階大会議室において、平成28年度第1回札響くらぶ運営会議をスタッフ18名が参加して開催、8件の議案について協議しました。

●第2回札響くらぶ運営会議開催

5月10日（火）午後6時00分から札幌コンサートホール2階大会議室において、第2回札響くらぶ運営会議をスタッフ16名が参加して開催、5件の議案について協議しました。

●平成28年度札響くらぶ総会開催

5月14日（土）午前10時30分から札幌コンサートホール2階大会議室において、平成28年度札響くらぶ総会を会員30名が出席して開催、4件の議案の審議、可決、役員改選が行われました。

●札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業実施

5月14日（土）、第589回札響定期演奏会において、中の島、厚別北、厚別南各中学校計129名を招待しました。

●札響くらぶ交流会開催

5月14日（火）午後4時30分からテラスレストラン・キタラにおいて、札響くらぶ交流会を会員、楽員併せて35名ほどが参加して開催、交流しました。

●第14回札響くらぶサロン開催

6月4日（土）午後5時30分から札幌市教育文化会館において、会員等51名の参加を得て第14回札響くらぶサロンを開催しました。

●札幌市内中学校吹奏楽部札響定期演奏会招待事業実施

6月11日（土）、第590回札響定期演奏会において、太平、北栄各中学校計97名を招待しました。

●第3回札響くらぶ運営会議開催

6月27日（月）午後6時00分から札幌コンサートホール2階大会議室において、第3回札響くらぶ運営会議をスタッフ20名が参加して開催、7件の議案について協議しました。

（副会長　武藤義典）

編集後記

◆公園内に建つコンサートホールは素敵だ。演奏会が終わり、心地良い気持ちで公園を歩いていると、風が木々を揺らし葉擦れの音、水辺で遊ぶカモの声。自然界が創り出すメロディが聴こえてくるのだから。（武田）

◆舘野泉さんがフィンランドの四季を語った言葉の中に、北海道の風景が重なり深く記憶に残る。六月末、札幌での演奏会は是非行きたい。この会報が届く頃、シャコンヌの音の響きと共にきっとまだ余韻の中…（島）

◆居間から見える円山もすっかり緑の季節になった。札響くらぶも二十年。継続は力なりで企画も次々と根付いた。次なる企画は？　新しいスタッフに期待したい。（章子）

◆会報インタビュー、くらぶ交流会、サロンの講師などの折々に、ますます楽員さんの魅力にとりつかれる私。くらぶ会員さんやキタラボランティアの方の会話で聞く音楽への熱い思い。そして皆さんのやさしさ。音楽って…（静）